

な方と申しても過言ではありません。謙讓なお方でした。敬神崇祖の念厚くして御祖先の命日法要は欠かさず、各神社にもお供物を届ける有様です。

御病身のお体で自肅自戒の日々を送られておられました。五十三年年々末脳血栓にて倒れ、五十八年一月頃から体力もおち、五十九年九月四日突然心不全で八十五才の人生を静かに朽ちる様に終えられました。文学はお好きで文章も簡略で面白く、和歌、俳句等も楽しんでいました。最後に二、三首を紹介して、高棟様のお人柄と在りし日の生活の様子を偲びたく存じます。

吹く風にやぶるほどの古羽織

我が着しときの叔母の笑い様

食卓に雷鳥の絵を立てかけて

嶺吹く風に食すが楽しも

いかならむ御最後なりとも思い出は

呵々大笑の面影ばかり

昭和五十九年十月十日記

表紙解説

栗林正明寺跡層塔

仏の里と言われる直川村赤木字栗林の杉林の中にある。伝承によれば、中世の頃この地に寺院が建立されたが、大友宗麟のキリシタン信仰により焼払われたという。寺号は正明寺と伝えられている。

層塔には銘記があり応永十八年辛卯三月十五日（一四一一）とあり、五七四年前の室町前期の建立である。周辺に宝塔・五輪塔などの遺物が散乱し、埋設しているものも多く、掘れば至る所から出るという。

所有者の話によると、この層塔は昭和二十年頃までは完全な形で存在していたが、終戦後の混乱期に盗掘され、破壊されたとのことである。

現在の塔は、昭和四十七年四月に復元されたもので、原形は五層、実測数値によって復元すると、高さ約三・六mになる。塔身の四面に月輪を浮彫りにし、中に金剛界四仏の種字を薬研彫している。復元時舍利仏が無傷の状態で出土したので、仏舎利の供養塔と判明した。

（『直川の文化財』より）